

# つらい耳鳴り、 きちんと診断を受けて対処する

耳鼻咽喉科 埼玉医科大学内科リハビリテーション科 大岡原大次先生に話をうかがいました。

開りで音がして、いないのに、耳の中では不快な音が聞こえる。健康な人々も体調によって一過性の耳鳴りは経験しますが、それが一年以上の間に何度も繰り返して起こるよう、耳鳴りには早めの耳鼻咽喉科受診を勧めます。耳鳴りに悩む人の難題を併せていることが多く、早期の治療が必要な病もあるからです。たとえ原因がはっきりしない耳鳴りでも、早くから症状を軽減させる治療を受け、上手に耳鳴りと向き合っていくことが目指していきましょう。

ほとんどの耳鳴りは、難題を併せて、中々も多いのが内耳の障害によるもの

患者さんはどんな難題を訴えるのでしょうか。

大岡原 耳鳴りの音は、ザー、ザー、キーン、ブーン、ゴーンなど、さまざまです。いずれにしても、開りで音がして、いないのに、耳の中で不快な音が聞こえるのは、音を聴き取る回路のどこかに異常が起きていると推察されます。



難題が多ければ、つらい耳鳴りです。

大岡原 はい、耳鳴りのほとんどの場合は本人が強い感じなきっかけからの難題を伴って、まず、難題をひとつひとつ気をつけることです。

耳は外側から大きく、外耳・中耳・内耳」といいうつつの部分で構成されています。

内耳にある蝸牛の内部には、音を伝える毛細胞があり、毛細胞の先端には、聴神経の細胞が接続し、聴神経の細胞から電気信号が送られて、その信号が聴神経から脳に送られ、脳で知覚して認識される。



耳鳴りと難題の関係

す。外耳と中耳に異常があっても、難題を「伝言性難題」といい、内耳に異常があっても、難題を「感音性難題」といいますが、ある場合を「混合性難題」といいます。

「伝言性難題の難題にはどんなことを気をつけられますか。」

大岡原 耳耳道を開く、「耳垢」のはが、「中耳炎」や「中耳炎」などの病気があります。これらは適切な治療によって治すことができます。関連するのは感音性難題です。

「感音性難題をどのように気をつけて原因は？」

大岡原 感音性難題の多くは、内耳にある音を伝える「蝸牛」の障害によるものと推察されています。蝸牛の中には音を伝える細胞である「毛細胞」があります。この細胞が生じた毛が折れたり折れたりして障害されると、難題になります。それと同時に、壊れた毛細胞から異常な信号が送られて、それが聴神経から脳に伝わり、耳鳴りが起るものも少なくありません。

感音性難題を引き起こす病気には、突発性難題、メニエール病、内耳炎、老人性難題、そして聴神経腫瘍などがあります。

ります。このうち、老人性難題以外は、いずれも早期に治療が必要な病気です。

突発性難題など、突発的に起る耳鳴りは早期治療が決め手

若い女性患者が突発性難題で悩んでいて、

大岡原 突発性難題は、耳鳴りと難題とははめを伴うのが特徴で、それによって何の異常もない人に突発発症します。患者さんは男女老若問わず10〜60歳代の幅広い年齢層に及び、年間の発症数はおおよそ1万人、1万人あたりではよく見られる病気です。患者さんの多くは、発症前に体調が良かったり、過労やストレスを抱えていたなどのことが多いです。

なぜ突発性難題・耳鳴りが起るのか、原因ははっきりしていませんが、内耳の細胞障害やウイルス感染などが有力候補です。治療はすぐに始めて、障害を抑えるためのステロイド薬や内耳前庭液改善剤などの薬の投与を勧めています。



教科書中心、2017、1985年東京大学医学部卒業。日本医科大学耳鼻咽喉科科、宇都宮大学耳鼻咽喉科、埼玉医科大学耳鼻咽喉科を経て、日本耳鼻咽喉科専門医、医学博士（神経科学・耳鳴り治療）、身体障害者福祉法研究員、精神科認定心理士、臨床心理士（日本心理学会）、日本聴覚医学会、日本耳科学会。